



第1回から第12回までこちらに記載しております

第1回読書同好会 2012/5/31 (木) 13時～ クリスタルタワー4Fにて 10名参加

本：「読書力」 斎藤孝著（岩波新書） / 「老いる覚悟」 森村誠一著（ベスト新書）

「読書力」では音読の意義、読書の意義を語る方が大勢でした。「老いる覚悟」ではあまり参考にならないという意見や「覚悟」というネーミングはいかがなものか、といった意見がありましたが、逆にこれからの生き方の参考になるとも。

同窓のメンバーで自由闊達に意見を言える、とても楽しい時間となりました。

第2回読書同好会 2012/8/30 (木) 13時～ クリスタルタワー4Fにて 8名参加

本：「大往生したけりや医療とかかわるな」 中村仁一著（幻冬舎新書）

現代の過剰な医療に対する警鐘の話題本。どの辺まで医療とかかわったらよいかは個人の問題。「死に方」を考えるのではなく死ぬまでの「生き方」を考えることが大切。個人の死生観とも関係することによっていろいろ考えさせられた。

第3回読書同好会 2012/11/29 (木) 13時～ クリスタルタワー4Fにて 8名参加

本：「スローライフ」 筑紫哲也著（岩波新書）

“ゆっくり、ゆったり、ゆたかに”、を日本ではおろそかにしてきたのではないかと。子供たちはファーストな生活を強いられてきた結果、眼に光がないのではないかと。ロハス---健康で持続可能性のあるライフスタイル---という言葉が印象深い。

そのほか、参加者ご自身の実践や見分も多く発表されました。話題は「老人いじめ」にも。高齢者を地域で支えるシステムの例が紹介され、そんなシステム作りができないか、との意見も出されました。誰しもがいつか直面する大きな課題の解決法は一つではないが、読書をすることや話し合うことによっていくつかのヒントは得ることができるのではないのでしょうか。

第4回読書同好会 2013/01/31 (木) 13時～ クリスタルタワー4Fにて 11名参加

本：「ロハスの思考」 福岡伸一著（ソトコト新書） ヒトは母体で進化の歴史をたどりながら成長し誕生し、新しい生物は環境との調和バランスの中で生まれる。これらはすべてゆっくりした時間が背景にあり、スピーディな思考が要求される現代的なやり方とは反する。著者はこの時間軸を考慮に入れない考えに違和感があり、やがては自然からの逆襲を受けるのでは、と警鐘を鳴らす。

現代はさまざまな恩恵を受けつつ生活を送っているが、少しそのことを見直すことも大切なのでは、という意見が多く出された。

遺伝子組み換え、サプリメント服用、臓器移植、牛肉の自由化等々、私たちがこの時代に直面する課題は多いが、よく考えて環境と仲よく暮らすことを考えたいものです。



第5回読書同好会 2013/5/16 (木) 13時～ クリスタルタワー4Fにて9名参加

本：「学び続ける力」池上彰著（講談社現代新書）

池上氏はテレビでも活躍中の著名なジャーナリスト。2012年より東京工業大学リベラルアーツセンター教授として、毎週理系の学部生に一般教養を教えておられるが、「一般教養として現代社会について教えながら考えたことを書いて頂きたい」との依頼に応えた著作。そして価値観が多様化している現在「出来る人間」「専門家」は新しい時代に対応できず、すぐに役立つことはすぐに役立たない。今またリベラルアーツの大切さを見直すべき、と。「学ぶ」ことで未知の世界に歩を進め、その結果広がる世界を体験できる。教養はより良く生きるために必要なのである。

第6回読書同好会 2013/8/29 (木) 13時～ クリスタルタワー4Fにて8名参加

本：「知の挑戦-本と新聞の大学Ⅰ、Ⅱ」

“知”を身につける方法は「生もの」--実際に起こっている事実を人や新聞などの報道から得る情報と「干し物」--古典から得る知識、をバランスよく取り入れる必要がある。この本は東日本大震災後に出版されたので、内容は震災や原発事故について触れているものが多い。原発に対する安全性が叫ばれる今、日本人の科学に対する“知”の貧困さが露呈され、科学に対しての批判精神を養うなどやはり教育の重要性が指摘されている。またあのような非常事態に対してのお粗末な東電と政府の対応が指摘され、命令系統を定めた非常事態法が必要ではないか、との意見が述べられている。さらに昨今の対中国政策、世界経済、日本の政治家の言動に対する著名人の講義から、現在の時事を正しく判断するためにはますます“知”を身につける必要性が感じられた。

第7回読書同好会 2013/10/31 (木) 13時～ クリスタルタワー4Fにて9名参加

本：「知の逆転」ジャレド・ダイヤモンド他5名著（NHK出版新書）

学問の叡智と常識を逆転させた6人へのインタビューの記録。6人は、哲学者、精神科医、IT専門家、生物学者などで、分野の異なる現代の著名人を相手に的確な質問をして内容豊富な一冊に仕上げたインタビューアの吉成真由美氏の博学ぶりに喝采。

広島長崎への原爆投下は人類史上最もひどい犯罪行為との指摘。日本人はこのことをもっと認識するべきではないか。米国の軍事費は世界の他の国全部を合わせた額と同じである。

チンパンジーとヒトの遺伝子では2.3%しか違わないが、脳の重さは人がチンパンジーの4倍の大きさである。ヒトは直立して行動すること、言語を使うことで脳を発展させた。教育は先生と生徒のポジティブな関係が大事で先生の情熱が生徒にやる気を起こさせ、能力を引き出させる。科学は優れた個人によって生み出されてきた。経験や環境が遺伝子の発現を促す事実がわかってきており個人の能力が発揮される環境を作るために教師の役割は大きい、現在の社会では難しくなっている。教育は政治から独立させるべきではないか。

オリバー・サックスは、障害を持った個人の症例から人間の脳についての未知の可能性について研究を



行っている。ダンスは人間にしかできない、と指摘。脳にとってはリズムとテンポという音楽のビート（拍子）が重要な意味を持つ。音楽の脳へ及ぼす可能性が述べられていて、認知症への治療の可能性も期待されるのではないかな。

ITについての“誰も知らない最大の会社”（アカマイ社）を設立した数学者の話は、ほとんどのサーバーの会社がアカマイ社を利用しているということを知り、今後益々重みを増してくると思われる。そしてサイバー攻撃や戦争など理解できない分野だけに不気味である。またネット社会になり、直接会って話をしたり書いたりする機会が少なくなり、ネット依存などの不安が残る。



第8回読書同好会 2014/1/30（木）13時～ クリスタルタワー4Fにて10名参加

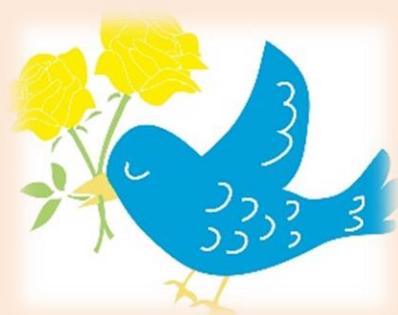
本：「貧困大国アメリカ」堤美果著（岩波新書）

堤氏は過去に“ルポ貧困大国アメリカ”を出版しており、これは2012年6月に出版された3冊目で、今までの集大成ともいえるべき本である。よくここまで膨大な量を詳細に取材し、現在のグローバル化した経済の問題点を浮き彫りにし、まとめ上げられたものと感心する。

SNAP--米国で月に一度夜中の0時に貧困層のために支給される食料品。今や7人に一人がSNAPに依存しており、それが米国自治体（州）の財政を圧迫している。今後5年以内に全米の9割の州が財政破たんするのでは、との予想もある。SNAPの食品は低価格のものであり、低コスト、短期多量生産を成り立たせている経済の背景にはグローバル化した巨大企業の存在がある。グローバルな巨大企業は農家に遺伝子組み換え種子と除草剤をセットで売り付け、これらの企業の農業・酪農・養鶏業政策は地球規模で産業の空洞化、失業者の増加をもたらす。巨大企業の投資家と経営者のみが富を増やし、その他は奴隷労働を強いられている。いわゆる1%の富裕層と99%の貧困層を生み出す構図である。これらの企業はマスコミを買収し、教育や自治体・国家の政治に対しても影響を与え、米国の民主主義は消失の危機にさらされている、という。米国だけでなく、イラク、アルゼンチン、インドといった発展途上国の国民はもっと深刻に奴隷労働化していると紹介している。

TPP交渉でゆれる日本の将来が心配であり、出席の皆さんからは、日本でも起こっている、また将来起こりうる巨大企業による影響や格差、貧困の実態が紹介された。このような巨大企業に巻き込まれないように生きていくにはどうすればよいのか、絶望的な気持ちになる。今後99%が1%に対抗して生きていくにはどうすればよいのかが話し合われた。

まずはこのような書物を読み実態を知ることが重要で、対抗できるような精神力を持ち、行動する機会を得ることが大事なのではないかと・・・。



第9回読書同好会 2014/5/29 (木) 13時～ 神戸市勤労会館にて 8名参加

本：「あの夏、少年はいた」川口汐子・岩佐寿弥著 (れんが書房新書)

「逢わなくもあやし」「パライゾの寺」ほか 坂東真砂子著 (集英社文庫)



坂東真砂子は母校家政学部卒の直木賞作家。2014年1月に亡くなられ、追悼の意味で作品を選んだ。参加者から「死国」、「わたし」、「ブギウギ」、「朱雀の陵」、「隠された刻」などの作品が紹介された。奈良時代、明治時代、戦前戦後などの神話や史実に基づいた題材を取り上げたミステリアスな物語は、“死”と“女性側から見た性”を主題にしたものが多い。それにしても著作毎に膨大な資料を調べ上げて、よくもこのような多彩な作品に組み立てられたものと感心した。直木賞をとられるほどの作家は並みの努力ではない苦勞をして創作活動をしていると思われるが、奈良女の同窓生がこのような作家のひとりであることで、直木賞作家がより身近な人として感じられた。また参加者の間でこのような強烈で個性的な作品が生み出された背景に関心が集まり、土佐高校出身のこと、イタリア留学やタヒチでの自給自足の生活、異国の人との同棲など世界をまたにかけた多彩な人生経験が作品に生かされているのでは、などについて話し合われた。今後も個性的な作品が期待されていたのにこんなに早く亡くなられたのが惜しまれる。

第10回読書同好会 2014/7/31 (木) 13時～ クリスタルタワー5Fにて7名参加

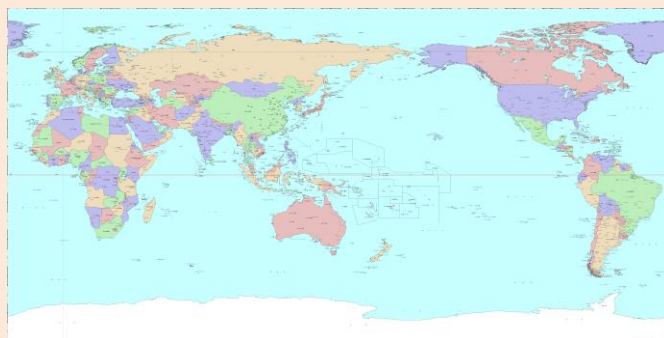
本：「伝える極意」(長井鞠子著) 集英社新書

45年に渡り第一線で活躍している同時通訳者が記した仕事の苦勞話や喜び、関わった要人のエピソードなど。今年“プロフェッショナルの流儀”というNHKの番組で彼女の素晴らしい仕事ぶりが紹介され、2月に出版された自伝と思われる著書を取り上げた。

通訳者は相手の話の内容を瞬時に理解して言葉を選び的確に伝えるのはもちろんのこと、相手国の事情や会談する内容について事前に深く調べておく必要がある。言葉そのものだけを伝えるのではなくて相手の心を理解して伝える能力がいるという。

通訳で接触した過去の要人のエピソードも紹介されていて、参加者からは「優秀な女性だなあ！」という感嘆の声と同時に、その破格の努力が印象的であった、との意見が多かった。

グローバルな活躍が期待される日本の若者たち、まず自分の意見を持つこと、さらに文化を含めた豊富な英語と日本語の知識を持ち、相手に的確に伝える論理的な話し方を習得する必要があるといえる。小学校から英語必修の動きがある中、まず日本と日本語をよく知り、自分の意見を述べるという訓練が必要で、英語を幼少期から導入することの是非についても参加者の間で議論された。



第 11 回読書同好会 2014/10/30 (木) 13 時～ クリスタルタワー5F にて 7 名参加

本：「世界は分けてもわからない」（福岡伸一著）講談社現代新書

福岡氏の本は「ロハスの思考」について 2 回目である。内容が専門的で難解であったが、参加者の皆さんは読破して面白かった、という印象であった。前半で食品保存用に使用されるソルビン酸などいわゆる食品添加物の話題で盛り上がった。また後半に書かれている生化学者ラッカー研究室のスキャンダル的事件は、ラッカーの仮説に合うようにデータを捏造した若手科学者の話で、STAP 細胞の事件と重ね合わせ興味が持たれた。

この本の主題について、著者はあらゆる要素は互いに関連しつながら、世界に部分はなく切り出せるものではない、しかし世界は分けられないことにはわからないし、分けてもわからない、と結んでいる。分子生物学者の著者は生物学でとくにこの主題を強調したいのでは、と思われた。

読書週間にちなんで、新聞記事に記されていた「一人の読書は足し算型、読書会は掛け算型」、つまり一人で読むより、多角的で広い視野が得られるのが読書会である、という記事に励まされた。



第 12 回読書同好会 2015/1/29 (木) 13 時～ クリスタルタワー5F にて 7 名参加

本：「日本人に生まれて、まあよかった」平川祐弘著（新潮新書）

1931 年生まれ、84 歳の著者は戦前戦後の激動期に青春を過ごし、比較文学者として種々の国で教壇に立ってきた。世界から日本を観察する経験を重ねてたどり着いたと思われる表題の本である。

確かに日本は治安が良いし、清潔で、宗教も自由、一応皆平等、政治的にも安定している。しかしインテリは、日本を自虐的に批判し自国に自信を持っていない。そして現在の日本及び日本人の世界的地位は低い。なぜこのようになったかについて、歴史的、教育的見地から考察している。将来日本の世界における地位向上のためにどのようなことを期待するかが述べられている。周辺国からの脅威が懸念される昨今、著者の多少保守的な意見が気になるが。

参加者の関心は自分の意見でものが言える英語教育に集まり、いつからどのように教育し、世界に通用する人材をどう育てるかが議論された。次世代においても「日本人に生まれて、まあよかった」と思える日本でありたいが、我が国には国際的にもしっかりした対応のできる政治家の出現が望まれる。

